九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

# 楠本家三代の家学と退渓学

柴田, 篤
九州大学

https://doi.org/10.15017/18216

出版情報：中国哲学論集. 31/32, pp.121-133, 2006-12-25. 九州大学中国哲学研究会
バージョン：
権利関係：

# 楠本家三代の家学と退渓学

柴田　篤

## 一　はじめに

朝鮮王朝時代の代表的朱子学者である李退渓（名は滉、一五〇一～一五七〇）の学問と思想は、朝鮮のみならず江戸期の日本の儒学者にも大きな影響を与えた。殊に山崎闇斎（名は嘉、一六一八～一六八二）に始まる崎門の儒学者や、さらには幕末維新期の朱子学者・陽明学者たちが、李退渓の書物から強い刺激を受けたということは、周知の事実である。[1] 崎門三傑の一人である三宅尚斎（名は重固、一六六二～一七四一）の学統を継いだ、幕末平戸藩の儒学者、楠本端山（名は後覚、一八二八～一八八三）、その弟碩水（名は孚嘉、一八三二～一九一六）においても同様のことが言える。

この両者と李退渓の思想との関係については、既に岡田武彦氏（九州大学名誉教授、一九〇八～二〇〇四）が、「楠門学と李退渓―闇斎の学と退渓の道―」（『江戸期の儒学』所収、木耳社、一九八二）という論文において、詳細な検討を行っている。本稿は、端山と碩水に加えて、端山の息子である海山（名は正翼（まさすけ）、一八七三～一九二一）、さらにその息子である正継、すなわち九州大学中国哲学史講座初代教授の楠本正継博士（一八九六～一九六三）に至る、いわゆる楠本家三代の家学と退渓学との関係について、特に関連書籍の蒐集を中心に考察を行うものである。従来、楠本正継博士の学問に関しては、しばしば「家学の継承」ということが指摘されてきたが、楠本博士自身が自らの家

学について、公刊された文章の中ではほとんど言及していないこともあって、その具体的内容については必ずしも十分に明らかにされてこなかった。本稿では、退渓学に対する見方を一つの視点として、この問題についても若干の考察を行っていきたい。[2]

## 二　楠本家三代の人々

はじめに、楠本家三代の人々について、簡単に触れておくことにする。[3]

楠本端山は肥前針尾に生まれ、平戸の藩黌維新館に学んだ後、江戸の佐藤一斎の門に入り、吉村秋陽や大橋訥庵らに学ぶ。帰国してからは藩の国学教員となり、幕末の藩政改革にも関わる。維新後も要職にあったが、明治六年に罷免される。同一三年に、旧藩主である松浦詮が平戸に創設した私学「猶興書院」（後の平戸中学猶興館、現在の長崎県立猶興館高等学校の前身）の教授となるが、翌年には故郷針尾に帰り、弟碩水と共に、私塾「鳳鳴書院」を設立する。そして同一六年に享年五十六で逝去する。

端山の弟碩水は、兄端山と同様、平戸の維新館に学んだ後、九州各地に遊学し、のち江戸に出て学ぶが、九州遊学中に肥後長洲の月田蒙斎（名は強、一八〇六～一八六六）から崎門の伝授を受ける。兄端山と共に、山崎闇斎―三宅尚斎―久米訂斎―宇井黙斎―千手廉斎―千手旭山―月田蒙斎へと流れる学統を継承した碩水は、大学少博士にまでなるが、三十九歳の時に役職・家禄を辞し、針尾に隠棲する。以後、八十一歳でこの世を去るまで、ひたすら崎門の朱子学の伝承のためにその身を尽くした。

幼くして父端山を亡くした海山は、叔父碩水の庇護と薫陶を受け、その傍らにあって、同じく崎門朱子学者としての生涯を送ることになる。碩水がこの海山の協力を得て完成させた事業が、崎門学者の伝記資料を収めた『日本道学淵源録』の増補編纂であり、崎門の学統系図『崎門学脈系譜』の作成であった。[4]海山は叔父碩水を助けて、このような崎門顕彰の事業を完成させる。彼は生涯ほとんど出仕することもなく、父端山の詩文集（『端山先生遺書』八巻、明治三六

年）などを刊行したほか、宋明儒学関係漢籍や崎門写本の蒐集や書写を行い、大正一〇年に、享年四十九で逝去する。

海山の長男である楠本正継博士は、東京帝国大学文学部支那哲学科を卒業したのち、大正一五年（一九二六）一〇月、九州帝国大学（現九州大学）法文学部助教授として赴任する。以後、昭和三五年（一九六〇）に定年退官するまで、九州大学における中国哲学史研究の礎を築く。楠本博士は生涯をかけて、朱子学や陽明学を中心とした宋明儒学思想の研究を行い、最晩年に生涯の研究の総決算として『宋明時代儒学思想の研究』（廣池学園出版部、一九六二）を出版するが、その翌年昭和三八年に、福岡市の自宅において六十六年の生涯を終える。[5]

楠本博士の宋明思想研究の前提として、端山、碩水、そして父海山が生涯をかけて蒐集し、また書写した膨大な量の宋明学、崎門学関係の書籍があったと言える。楠本博士蒐集の書籍を含めて、楠本家三代の旧蔵書は、現在主として次の機関に収蔵されており、[6] その中に、退渓学に関する貴重な書物も含まれている。

長崎県立長崎図書館「楠本文庫」（端山・海山旧蔵書）
九州大学附属図書館「碩水文庫」（碩水旧蔵書）
國士舘大學附属図書館「楠本文庫」（正継旧蔵書）

## 三　李退渓に対する評価

次に、岡田武彦氏の前掲論文を参照しながら、端山・碩水と退渓学との関係について見てみることにする。同論によれば、端山が李退渓に直接言及しているのは、広島藩の崎門学者である金子霜山宛の和牘の中に、朝鮮において程朱学の伝承を得た者としてその名が見えるだけであるが、[7] 後述のように、端山は朝鮮版の『退渓文集』を購入しており、退渓の文章を読んでいたことは確かである。また、海山によれば、退渓の著した『易学啓蒙伝疑』四巻の和刻本二冊（寛文九年刊本）の欄外に見える朱筆による書き入れは端山のものであったという。[8] 一方、碩水は李退渓について次のように言及している。

李退渓は見事に朱子を学んだ。『朱子書節要』を読めば、そのことが分かる。[9]（『碩水先生遺書』巻八、随得録一）

闇斎は十分に朱子の学を究め、退渓は十分に朱子の道を学んだ。いずれも元明の諸儒の及ぶところではない。[10]（『碩水先生遺書』巻十、随得録三）

朝鮮の諸儒では、退渓以前は退渓に折衷されてしまい、退渓以後では退渓の外に出る者はいない。静・退・牛・栗（趙静庵・李退渓・成牛渓・李栗谷）の四賢を併称するのは、おそらく正論ではないだろう。[11]（『碩水先生遺書』巻十一、随得録四）

碩水はこのように李退渓を高く評価し、闇斎の言を受けて、「朱子以後随一の人物である」と述べている[12]（『碩水先生餘稿』附録一）。岡田氏は、端山・碩水ら「楠門が退渓を尊信したのは、退渓と同じく精切な体認の学に従ったからである」[13]と述べている。このような碩水の考え方を受け継いで、端山の息子海山は李退渓について次のように述べている。

程朱学が朝鮮に伝わって久しくなるが、道徳の純粋さ、学問の精密さということになると、何と言っても李退渓先生である。先生は篤く道を信じ学を好み、終身倦むことなく、道に沈潜して深く考え、その神髄を会得され、精緻に認識して懸命に実践し、他のものに惑わされることもなく、ひたすら励んで義理を体認して止むことがなかった。元明の時代でもこのような人物はいなかった。我が国の山崎闇斎が、彼の学問と人物を深く知って、東方随一の人物とした。[14]（『鳶魚斎詩文』所収「書退渓先生文集筐底」）

さて、以上のような見方に対して、楠本正継博士はその著書や論文の中で、李退渓の言葉を引用することはあっても、[15]退渓思想そのものを特別に取り上げて論述することはしていないが、唯一、晩年の論考である「熊本実学思想の研究—大塚退野並びに其の学派の思想—」（『九州儒学思想の研究』、一九五七）において、[16]大塚退野（名は久成、号は孚斎・退野、一六七七～一七五〇）の思想と退渓学との関係について、詳細な分析と検討を行っている。その中で李退渓の思想について次のように述べている。

李退渓は自省録でしばしば理内外なき事に論及してゐるが、これは退野をして陽明の唯心思想から脱却せしめる

機縁となったに相違ない。然しながら、退渓はまた此書で主敬の功夫を詳述してゐる。（中略）されば理に内外なしと雖も、心の主体性を立てていく敬の工夫は特に重んぜられてゐるといへよう。かくて心の功夫が特色を持って来てゐることが分る。（中略）さればここには心を尊ぶ思想が強く表はれてゐる。（中略）朱子学は李退渓によって人間の心の学問としての深さを増していたと見るべきであり、退野が此人の思想に接触したのは心機に触れたものであったらう。[17]

楠本正継博士は、李退渓によって朱子学が心の学として深化したこと、その李退渓との接触が大塚退野の思想に大きな影響を与えたということを指摘しているが、かつて碩水は李退渓と大塚退野について次のように述べている。

退渓と退野はいずれも見事に朱子の家法を体得している。退渓の「奇彦明に与えて読書の法を論ずるの書」や退野の「渡瀬秀才を送るの序」を読めば、そのことが分かる。[18]（『碩水先生遺書』巻八、随得録一）

また、碩水は退野に関して、「大塚退野の見解は実に明らかで、会得したものは実に深い。真の儒者と言える。[19]」（同上）、「大塚退野は師伝によらず聖学の要諦をしっかりと会得しており、真に豪傑の士である。博大精微ということとなると闇斎には及ばないが、自得したものはおそらく彼に勝るであろう」[20]（『碩水先生遺書』巻十一、随得録四）というように、その自得の学問を高く評価している。[21]

大塚退野に関する楠本正継博士の本格的研究も、碩水のこうした見解に導かれるものが大きかったと言える。なお、碩水の門人岡田康治[22]の旧蔵にかかり、後に楠本家の所蔵となった和刻本『朱子書節要』二〇巻（寛文一一年跋刊）[23]は、全巻にわたり朱筆による圏点が施され、朱墨の書入れが加えられており、大塚退野の手批本であるとされていたが、正継博士はその意見に賛成し、論文の中で詳細にそのことを論証している。[24]

## 四　李退渓関連書籍の蒐集

さて碩水は、「『退渓文集』及び『年譜』、『言行録』、皆読まざるべからず」[25]（『碩水先生遺書』巻十、随得録三）、

「『李退渓年譜』三巻附録一巻、『言行録』五巻附録一巻を、ずっと読んでいくうちに、李退渓は元明以降の諸儒の及ぶところではないということが分かった」[26]（『碩水先生遺書』巻十二、随得録餘）と述べているが、端山や碩水が李退渓関係の書籍をいかに苦心して蒐集したかということについては、碩水の門人貞方弥三郎（名は研、一八六八～一九五七）[27]が筆録した「碩水先生原稿雑記」（『碩水先生餘稿』附録一）に見える。

それによれば、碩水は平戸にいた頃に『李退渓文集』を売る者がいたが、貧しくて買えなかったので、藩主（心月公）に買い上げてもらった。後にまた一本があったので、端山に購入してもらった。碩水は後に退渓を益々篤く信じ、朱子以後随一の人物であるとした。明治三九年（一九〇六）の春に、『退渓言行録』と『年譜』を手に入れて読んだ。碩水は常々、「清初の陸稼書や張楊園、明初の薛敬軒や胡敬斎といった朱子学者も李退渓には及ばない」と述べた、ということである。[28]『退渓文集』購入の事情については、碩水の口述を息子正脩が筆記した『過庭餘聞』にも見えるが、[29]海山が大正四年（一九一五）九月に記した「書退渓先生文集筐底」（前出）には更に詳しく、次のように見える。

先考端山が平戸にいた頃、大阪の本屋が二部の抄本を送ってきた。春田尚平（名は有則、号は横塘）の旧蔵書で、一部は松浦家に購収してもらったが、一部は水損していたので返却した。その後また一抄本が届いたが、篠崎小竹[30]（名は弼、一七八一～一八五一）の手校蔵本であり、先考が購入し、自ら校正を加え、また叔父碩水に校訂させた。現在私が所蔵している本である。かつて（明治三一年）東京で友人の舞田養浩[31]（名は敦、号は脱斎）を訪問した際、『退渓文集』が話題になり、彼が一本を取り出してきたが、例の水損本であり、京都で入手したとのことだった。私は書物に霊能が備わりその所を得たことを喜んだ。[32]

海山はこの話に続けて、その後の李退渓関係書籍蒐集のいきさつについても書き記している。明治二七年（一八九四）の日清戦争の際、友人の吉田士発[33]（名は英厚、号は為斎）が京城（ソウル）で関係書籍を探索し、ようやく『年譜』、『言行録』、『続集』を入手するが、『年譜』以外は不完本であった。その後、朝鮮にいた丸山重俊[34]から碩水の所に『言行録』が送られてくる（『碩水先生餘稿』巻三「丸山重俊在韓国遠寄示退渓言行録詩以謝之」）[35]。そして、大正三年（一九一四）の秋に、旧友舞田養浩が東京神田の古書店に朝鮮版『退渓先生文集』が出ていることを報せてくれ

る。驚喜した海山は、すぐに代金六十円を含む金七十三円を彼に送り、この文集二十五冊を購入する。[36]「その書は古色蒼然として、補修された痕もない。大切に保存されており、紙魚もついていない。さらに、巻中の書き入れを読むと、誠に見るべきものがある。名家の手沢本であったに違いない。そもそも古人でも得難かったものを、私は手に入れたのだから、幸いと言うべきである。」念願の朝鮮版『退渓文集』をようやく手に入れた海山は、さらに次のように記している。「自らを顧みるに、学徳は古人に及ばないのだから、このような書物を手に入れても価値があるとは言えない。しかし、篤く信じ学を好み、斃れてのち已むという退渓先生の志から得るものがあれば、闇斎が先生から受け取ったものを窺い知ることができよう。[37]」

李退渓関係書籍の蒐集を通して、海山は朱子―退渓―闇斎へと流れ来った学問をしっかりと受けとめたのである。海山はこの文章に「附記」を書いているが、それによれば退渓関係書籍の朝鮮版を購収しようとさらに苦労した様子が分かる。退渓の『詩集』が名古屋の書店に出た折には、購入して碩水に献呈している。李退渓関連書籍の蒐集に対する海山の情熱は並々ならぬものがあったが、それは若き日に、伊勢桑名の秋山罷斎の門に遊んだ際、罷斎所蔵の『退陶先生言行通録』を書写したことからも分かる。[38]先にあげた「付記」において、碩水所蔵の『宋季元明理学通録』を自ら書写したと記した後、海山は「則ち退渓の書、蒐羅殆ど備われり」とこの文章を結んでいる。碩水は、明治四二年（一九〇九）に門人岡直養（号は彪村、一八六四～一九四九）に与えた書簡の中で、「李退渓の書は、ほぼ正翼（海山）の所に備わっている」と書き記している（『碩水先生餘稿』巻一「答岡二郎」）。かくして、端山、碩水を経て、海山の手によってその蒐集がようやく完了した李退渓関連書籍は、海山の息子である正継博士に引き継がれていくことになる。[39]

楠本正継博士は、その後の宋明儒学思想研究の中でそれらの書物を十二分に活用していくことになるが、前に見たように特に大塚退野の研究において、退渓思想そのものに深く論及することになる。その際、博士が使用した大塚退野関連の書籍、たとえば『孚斎先生存稿』、『孚斎先生語録』、『退野先生遺稿』などは、すべて父海山の書写した書物であったと考えられる。[40]海山は最後まで息子の学問を導き、見守っていたと言うことができる。

## 五　おわりに

以上のように見てくると、山崎闇斎以来、崎門の中に伝承されてきた退渓学に対する尊崇の姿勢、朱子学の展開における退渓学の思想的位置付けといったものは、楠本家三代の人々の中にも確実に継承され、また発展していったと言える。特に関連漢籍の収集を通して具体的な形で継承されてきた退渓学は、楠本正継博士の宋明思想研究にも大きな影響を与えたと言うことができよう。楠本家三代の家学と退渓学は、このように深く結ばれていたのである。[41]

〔注〕

（1）阿部吉雄著『日本朱子学と朝鮮』（東京大学出版会、一九六五）を参照。

（2）楠本正継博士の学問については、拙稿「楠本正継博士的宋明儒学思想研究」（『台湾東亜文明研究学刊』第2巻第2期、国立台湾大学人文社会高等研究院、二〇〇五）、「楠本正継博士覚書」（『名古屋大学中国哲学論集』第六号、二〇〇七刊行予定）を参照。また、楠本正継博士とその家学については、猪城博之著『感恩記』（西日本文化協会、一九九九）所収の「儒学と現代」、「楠本正継先生のこと」を参照。

（3）以下に見える楠本端山、碩水、海山の詳細な伝記や学問・思想については、岡田武彦『楠本端山―生涯と思想』（積文館書店、一九五九）、同『楠本端山』（『叢書日本の思想家』第42巻、明徳出版社、一九七八）、藤村禅『楠本碩水伝』（芸文堂、一九七八）、岡田武彦等編『楠本端山碩水全集』（葦書房、一九八〇）、拙論「『鳶魚斎詩文』―明治の儒学者楠本海山の詩稿と文稿―」（「九州中国学会報」第33巻、一九九五）、同「楠本海山覚書―ある崎門学者の生涯と著述―」（「香椎潟」第49号、二〇〇三）等を参照。

（4）『日本道学淵源録』は日向高鍋藩の儒者である大塚観瀾（名は氏静）が編輯し、同じ高鍋藩の千手旭山が校補したもので、幕末、旭山の門人で肥後玉名郡長州の月田蒙斎の手を経て、端山及び碩水に伝授されたものである。碩水は『淵源録』及び『淵源続録』の大幅な増補を行った上に、『続録増補』二巻を新たに編纂する。碩水の序は明治三三（一九〇〇）年一二月に

書かれるが、昭和九（一九三四）年にその門人である岡彪村の手によって東京で出版される。『崎門学脈系譜』は、明治二四年（一八九一）に碩水が自ら序文を記し、翌二五年（一八九二）七月には一応の完成を見るが、さらに増補を行い、同三六年（一九〇三）に桑名の佐治為善の手で出版される。しかし、その後も岡彪村ら門人たちが増訂を行い、昭和一五年（一九四〇）に東京で出版され、翌年には索引を付して再版されている。

(5) 主著として、『宋明時代儒学思想の研究』（廣池学園出版部、一九六二、増訂版、一九六四）がある。没後、『楠本正継先生中国哲学研究』（國士舘大學附属図書館編、一九七五）が刊行される。

(6) 『碩水文庫目録』（九州大学附属図書館、一九三四）、『楠本文庫目録』（國士舘大学附属図書館、一九七三）を参照。

(7) 『江戸期の儒学』四二四頁。

(8) 國士舘大學「楠本文庫」所蔵の同書に見える。

(9) 李退渓善学朱子。観朱子書節要可以見矣。

(10) 闇斎則能究朱子之学、退渓則能究学朱子之道。皆非元明諸儒所及也。

(11) 朝鮮諸儒、退渓以前折衷於退渓、退渓以後無出於退渓之外者。静退牛栗四賢併称、恐非通論也。

(12) 先生後来信退渓益篤、以為朱子後一人。

(13) 『江戸期の儒学』四二六頁。

(14) 洛閩之学入朝鮮也尚矣。至道徳之真純、学問之精粋、則退渓李先生蓋其人也。先生篤信好学、終身不倦、深潜玩味而得其真腴、精知力践而無多岐之惑、循循勉勉以真知義理無窮。元明之間不見其比。吾邦山崎闇斎、深知其学問人物、以為東方之一人矣。

(15) たとえば、「宋明思想家の考えた教育の本質」（「九州大学教育学部比較教育文化研究所紀要」第8号、昭和三六年）において、董仲舒の「正其誼不謀其利」の語に対する朱子の評価を取り上げた中で、李退渓の「答黄仲挙論白鹿洞規集解」（『退渓文集』巻一九）の語を引用して、「かやうに説く立場は、人間の肉体的・身体的存在から来る物質欲望が追ひ求める利益を一応は認めてゐる。同時にこれを制御していかうとする。そして制御の据り所を人間に内在するその性（うまれつき）、性に本づく道

徳、道徳に本づく教へに求める。ここにはかやうにしなければ欲求自身の破滅を将ち来らすぞといふ理窟といふよりも、かやうにすることが天の命ずる所、その法則だといふことを強く感ずる内面的体験、云はば宗教的感動又は信念がある。」と述べている（『楠本正継先生中国哲学研究』、國士舘大學附屬図書館、一九七五、一九九頁）。

(16) この論考は、ガリ版刷りの科研報告書の中に収められるが、後に「大塚退野ならびにその学派の思想—熊本実学思想の研究—」（『世界史における日本の文化—三枝博音記念論集—』、第一法規出版、一九六五）という形で公刊される。また、熊本実学派については、「実学思想についての試論—所謂実事求是の方法の可能な条件とその限界とに関連して—」（「九州中国学会報」第4巻、昭和三三年五月、一九五八）という論考が別にある。

(17)『楠本正継先生中国哲学研究』六四七頁。

(18) 退溪退野、皆菁得朱子家法。観退溪與奇明彦（彦明）論読書法書、退野送渡瀬秀才序、可以見矣。

(19) 大塚退野、所見極明、所得極深。可謂真儒者矣。

(20) 大塚退野、不由師伝而深得聖学之要、真豪傑之士也。博大精微、不及闇斎、然其所自得殆有過焉。

(21) 楠本碩水、大塚退野と李退溪の関係については、福田殖「李退溪と九州の儒学者—大塚退野と楠本碩水—」（『九州の中の朝鮮』、明石書店、二〇〇二）を参照。

(22) 岡田康治は熊本出身。明治三五年、碩水の古稀を記念して集められた詩文を編纂し、『碩水先生古稀引翼集』として熊本で出版している。

(23) 現在、國士舘大學「楠本文庫」に所蔵。なお、李退溪関連書の江戸期刊本については、阿部吉雄『日本朱子学と朝鮮』第三篇・第一章を参照。

(24)『楠本正継先生中国哲学研究』六四二頁。

(25) 退溪文集及年譜言行録、皆不可不読。

(26) 李退溪年譜三巻附録一巻、言行録五巻附録一巻、読之愈久而知非元明以下諸儒所及也。

(27) 貞方研については、拙稿「貞方弥三郎と柳浦文集」（「中国哲学論集」第11号、一九八五）を参照。

(28) 初在平戸、有售李退渓文集者。（春日尚平旧蔵。尚平名有則、号横塘。）時先生貧不能購。勧藩主購収。後又有一本。（篠崎小竹旧蔵、亦鈔本。）亦不能購。勧伯兄購収。先生後来信退渓益篤、以為朱子後一人。明治丙午春、得退渓言行録及年譜読之。毎曰、陸稼書不及張楊園。楊園不及退渓、薛胡亦不及也。

(29) 松浦家ニ在ル写本ノ李退渓文集ハ、遠里士徳ガ旧蔵本ナリ。横塘有則ガ序文モアルゾ。其ノ原本モ写本デ潮入本デアツタゾ。コレニモ附イテ居タゾ。潮入本ハ大阪ノ書林ニ返シタゾ。コノ本予ガ手ニ入ツタ時、貧困デ買フコトガ出来ヌカラ、松浦家ニ勧メテ買ハセタノゾ。端山ノ家ニアルノハ、篠崎小竹ガ旧蔵本デ、コレモ予ガ手ニ入ツタノヲ端山ニ勧メタノゾ。

(30) 篠崎小竹（一七八一～一八五一）は大坂出身の漢学者、漢詩人。名は弼、通称は長左衛門。江戸の昌平黌で古賀精里から朱子学を学ぶ。

(31) 舞田養浩は桑名藩儒秋山罷斎の門人。秋山罷斎（一八四九～一九二九）は名は勝機、通称は断。佐藤直方―稲葉迂斎―稲葉黙斎に連なる崎門の儒者。楠本海山は、明治三一年、二十六歳の時に桑名で秋山罷斎に従学する。

(32) 昔者先子在平戸也、大阪書肆送致二鈔本。横塘氏所有者。使松浦家収之。其一則為水損本乃還之。尋一鈔本又至。篠崎小竹手校蔵本。先子購之。又使叔父碩水訂之。今予所蔵者是也。余嘗遊東京、訪舞田養浩。談及之出示一書、即嚮所謂水損本、謂獲之京都。余窃慶書之有霊能得其所也。

(33) 吉田士発は舞田養浩と同じく秋山罷斎の門人。海山は明治二八年（一八九五）秋に大阪で初めて会い、大いに刺激を受ける。東京出身の士発は崎門の中でも稲葉黙斎（佐藤直方系）を尊崇していた。海山は「頗る才気有り」と評している（長崎「楠本文庫」所蔵『偶鈔』所収の自訂年譜を参照）。

(34) 丸山重俊（一八五五～一九一一）は、もと熊本藩士の出身で藩校時習館に学ぶ。警視庁第一部長警視を経て、明治三八年（一九〇五）に韓国政府の警務顧問として任用され、明治四〇年（一九〇七）に警視総監となる。翌年、島根県知事となり、明治四四年（一九一一）に死去する。詩人・丸山薫（一八九九～一九七四）の父。

(35) 碩水の詩は次の通りである。なお、海山の文章に「丸山顧問」と見えることから、丸山重俊が警務顧問であった明治三八年から四〇年の間のことと考えられる。

平生最慕退溪風　　平生最も慕う退溪の風
学術純然自不同　　学術純然として自ら同じからず
珍重一編言行録　　珍重す一編の言行録
使人仰鑽感無窮　　人をして仰鑽して窮まり無きを感ぜしむ

(36) 國士舘大學「楠本文庫」所蔵『退溪先生文集』四十九巻首二巻（二十五冊）の中に、舞田養浩の海山宛書簡二通が書店の領収書と共に残されており、この間の詳細はそこに見える。なお、『退溪先生文集』については、李顥煉編『韓国本別集目録』（法仁文化社、一九九六）六三〇～六三二頁を、また日本現存の『退溪先生文集』については、藤本幸夫著『日本現存朝鮮本研究　集部』（京都大学学術出版会、二〇〇六）七四九～七五五頁を参照。

(37) 其書古色蒼然、無修補之痕。愛護周至免蠹魚之患。且観巻中所書、確有所見。其為名家手澤本無疑也。夫以古人之難得、予輒獲之、可謂幸矣。自顧学徳不及古人、雖得之亦不足貴也。雖然有所得於先生篤信好学斃而後止之意、則闇斎所取乎先生者可窺焉耳。

(38) 國士舘大學「楠本文庫」所蔵『退陶先生言行通録』八巻の内、存二巻（巻一・二）一冊に記された海山の「識語」によれば、吉田士発が朝鮮で入手して秋山罷斎のもとにあった本を、海山が謄写したものである。

(39) 端山と碩水が校訂した後に海山の手に渡った篠崎小竹旧蔵の『李退溪先生文集』は、正継博士が九州大学に赴任した直後の昭和二年（一九二七）に九大の蔵書となっている。

(40) 楠本正継博士の次男である楠本韶氏宅に、現在も『孚斎存稿』、『孚斎先生語録』、『孚斎先生雑著』、『孚斎先生遺文』、『君子重習録』、『退野先生遺稿』等の写本が保存されている。最期まで博士の傍らに置いてあったと考えられる。

(41) 楠本正継博士の門下生の一人である猪城博之氏は、『感恩記』（西日本文化協会、一九九九）所収「楠本正継先生のことその一、思い出すままに・十」（二二八頁）の中で、次のように述べている。

「戦前・戦後を通じて、先生のお座敷の床の間には、木箱に入った李退溪の文集が、置かれていた。あたかもそれを祀るかの如く、それだけは、動かされることがなかった。佐藤仁さんにお聞きすると、それは朝鮮版の『退溪先生文集』

であったとのことである。（後略）」

この『退渓先生文集』こそ、海山が苦心して手に入れ、そして精読した朝鮮刊本であった（現在、國士舘大學「楠本文庫」所蔵）。常に床の間に置かれていた李退渓の文集、それは端山、碩水、海山と受け継がれてきた楠本家家学の象徴でもあった。

〔附記〕

（一）本論は、二〇〇五年六月二五日、正行寺春日山雅楽御堂（福岡県春日市）で開催された「第18回　韓・日・中　退渓学国際学会」において口頭発表した内容に基づいて、加筆修訂したものである。口頭発表の内容は、『退渓学論叢』第10・11輯（社団法人退渓学釜山研究院、二〇〇五年一〇月）に収載されている。なお、正行寺雅楽御堂境内には、二〇〇三年七月二四日に「李退渓先生顕彰碑」が建立（同年一一月三〇日に除幕式が執行）されている。

（二）本稿を書くに当たって、楠本韶氏、國士舘大學附属図書館、長崎県立長崎図書館、九州大学附属図書館に、それぞれお世話になった。記して感謝の意を表す。